

ホブズにおける Conscience の問題

郷家綾(慶應義塾大学)

通常、conscience が良心と訳される場合には、道徳的・倫理的意味をもつものと想定され、意識や自覚と訳される場合には、より中立的で、単なる心理学的な意味をもつものとして想定される。

しかし、ホブズの『リヴァイアサン』においては、良心のもつ道徳的・倫理的意味が剥奪され、逆に意識・自覚としてのconscience が「2人以上の人々と、1つの同じ事実について知っている時、彼らはその事実についてそれぞれ自覚している(Conscious of)」という、conscience の語源的な意味を担わされることによって、道徳的・倫理的な意味を付加されているように思われる。本報告は、その逆転の意図を明らかにすることを目的とする。

第一に、『リヴァイアサン』において良心の道徳的・倫理的意味が剥奪される理由を確認しよう。『リヴァイアサン』では、自然法にかなう行為が行われるべきだという欲望へと拘束される場(内面の法廷)を意味するものとして、conscience が良心と訳される。そして良心においては、自然法に反する行為が意図された時点で不正となり、神に対する罪が犯されたこととなる。しかし、『リヴァイアサン』において、道徳(moral)は「人類の交際と社会において善であるもの、悪であるもの」という意味であり、それゆえ、自然法が道徳法と称される理由も、自然法が人類の交際と社会において善であるものを指示する法であることに求められる。ゆえに、自然法が神の命令であるという規定や、自然法違反による神に対する罪は、ホブズにおける道徳とは無関係であると考えられる。

第二に、『リヴァイアサン』において共知(としての意識・自覚)に道徳的・倫理的意味が付加される理由を確認しよう。ホブズは、「いかなる人にとっても、彼の共知に反して話したり、他人にそのようにするよう堕落させたり強制したりすることは、非常に悪い行為(a very Evil act)と評価されたし、これからもそうだろう」と主張する。ホブズは、共知について論じる段階では、善が欲望の対象であり悪が嫌悪の対象であるという善悪の私的尺度についてしか説明しておらず、道徳については触れていないのであるが、この共知に関する主張と道徳が「人類の交際と社会において善であるもの、悪であるもの」という意味であることを考え合わせるならば、共知に反することは、明らかに道徳的悪として評価される対象として考えられるだろう。

では、このような逆転が引き起こされた意図は、何であるだろうか。言い換えるならば、何を目的として、道徳は良心(神)と分離され、共知と結び付けられるように規定されたのだろうか。

この問いに対し本報告は、『リヴァイアサン』において真理性が担保される認識として、神の属性についての知識が含められないことが、この逆転の基盤にあると考える。ホブズは、神の属性について不可知論的立場を採用し、聖書解釈の権利を主権者に委ねる。それによって、主権者が設定する市民法に関して、神の権威を借りて懐疑を差し挟む余地を排除しようとしているのである。そして代わりに、道徳と共知が結び付けられることによって、共通権力のない自然状態において、神を抜きにして道徳的善悪が成立する余地が残されているのである。